

近海漁業資源の家魚化システムの開発 に関する総合研究（抄録） イタヤガイの蛸集と害敵

大野明道・高橋伊武・吉尾二郎・石田健次

本研究はマリンランチング計画の一環としてイタヤガイを取り上げ、イタヤガイを漁場における高位安定な資源とすることを最終目標とするものである。昭和55年から開始された調査も今年で3年目を迎え、第一期研究計画のしめくり年度にあたっている。

そこで、これまでの研究経過と成果を簡単に報告する。詳細はプログレスレポート（1～3）を参照されたい。

要 約

1. 昭和55年度

島根県下一円の沿岸海域のイタヤガイの分布と環境要因について調査し、県西部に分布密度が高いことを確認した。環境要因との関係ではイタヤガイの9～10月の棲息範囲は、水温19.6～22.8℃、底層塩分33.8～34.4‰、水深40～120mにあることが認められた。

また、イタヤガイの減耗にかかわる要因は単一でなく、色々な条件が複雑に干渉し合って影響を及ぼしていると考えられた。

2. 昭和56年度

前年分布の多かった益田市沖合の水深70～80mの海底を精密調査し、天然礁の潮下にイタヤガイの分布が多いことを確認した。

食害については、着生から底生移行直後に食害種となりうるものが数魚種考えられた。

3. 昭和57年度

益田沖の天然礁ふ近を前年に引き続き調査したが、礁の潮下でイタヤ分布密度が高いという普遍性が感じられた。また、江津市敬川沖の水深40～120mで採集されたネズッポ類の消化管からは、殻長2～3mmのイタヤガイが周年にわたり検出され、イタヤガイの発生が周年にわたることが示唆された。また、ネズッポ類によって捕食されるイタヤガイの数は、県下で数十億に及ぶことが推定された。